

也、万葉集に見ゆ、蔓延の義、○下

〔倭訓栞中編二十〕はらばひ 神代紀に匍匐をよめり、腹もてはふをいふ也、万葉集に、赤駒の腹ば

ふとみゆ、新撰字鏡には、はらばひゆくとよめり、或は勃窣をよめり、

〔古事記上〕故爾伊邪那岐命詔之、愛我那邇妹命乎、那邇二字以音下效此 謂易子之一木乎、乃匍匐御枕方、匍匐

御足方而哭時、○下略

〔古事記中〕於是坐倭后、武尊妃等及御子等諸下、到而作御陵、即匍匐廻其地之那豆岐田、自那下三

而哭爲歌曰、那豆岐能多能伊那賀良、邇伊那賀良、爾波比母登富呂布登許呂豆良、

〔古事記下〕故是口子臣、白此御歌之時、大雨、爾不避其雨、參伏前殿戶者、違出後戶、參伏後殿戶者、違

出前戶、爾匍匐進赴、跪于庭中時、水潦至腰、

〔日本靈異記上〕嬰兒鷲所擒、以後國得逢、父緣第九

飛鳥川原板葺宮御宇天皇、皇極之代、癸卯年春三月頃、但馬國七美郡山里人家有嬰兒女、中庭匍匐

鷲擒騰空指東而翫、○中略

匍匐波不

〔枕草子八〕うつくしきもの

みつばかりなるちごの、いそぎてはひくる道に、いとちいさきちりなどの有けるを、めさとに見

つけて、いとおかしげなるをよびにとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし、○中いみじ

うこえたる兒の二つばかりなるが、しろふうつくしきが、二あるのうすものなど、きぬながくて、

たすきあげたるが、はひ出くるもいとうつくし、

〔平家物語六〕祇園女御の事

さしも御さいあいと聞えし、祇園女御を、たゞ盛にこそくだされけれ、此女御はらみ給へり、○中略